

五月 新学期 よく学び、よく遊べ

宇田道隆(海洋学者)

私の十代は一九一五—二四年(大正四—十三年)で、もう記憶もあやしく、ぼんやりしている。父(新聞記者)の勤めの関係で、高知、新潟、また高知と移り、小学校は四度転校、せっかく親しくなった友だちと別れるのは辛かった。高知一中から仙台の二高へは、大正十年—十三年だった。元来内気で、父に「抜作」と呼ばれていたほど気の利かない、腺病質の弱虫だったのが、方言などちがう土地へ移って苛められたりするのに反抗してたか、積極的な強い子に変わっていった。

新潟の海岸では、夏、「沖出しシオ」に流されて泳ぎの未熟なためアップアップ溺れたのを、小学六年生の兄に救けられた。新潟の砂丘は朱いグミが一面だった。冬の荒海はすごく、白い波のシブキにびつくりした。海岸の砂丘は年々侵食されていた。

読書好きは、少年雑誌、お伽話(学校図書館)などから始まった。高知に帰る途中、父に連れられて東京名所見物したのは印象深い。宮城、靖国神社、泉

岳寺、浅草、観音工場(デパート)など物珍しく、牛肉鍋などの美味も舌を喜ばした。横浜港では林のようにマストを列ねた船の群には、ただビツクリだった。私は好奇心の強い子だった。色々知りたいことが周りにいっぱいあった。知識欲に餓えていたといつてよい。高知に着くと、桜島の大噴火の灰が西風に運ばれて降り、そこら一面白くなって不思議に思ったのは忘れられない。高知へ帰って、父が失業して、家を転々数ヶ所移った。貧乏が何年も続いた。父は鉱山に手を出したので、家の庭にはマンガン、黄銅鉱、ニッケル、蛇紋岩、紅簾片岩、緑簾片岩などが転がっていた。



兄が化石採集に行くのについて行って、ハンマーで岩をたたくと面白いような「羊歯模様」や「二枚貝」がパツクリ現われ、佐川とか領石とか、あちこち山野での自らの小発見に満足した。高知郊外の自然は、明治大正時代、余り変りなく保全されていた。黒い榎の実、アケビ、山芋など山野で自然の味を楽しみ、祖父の家には桑の実、ミカン、アンズ桃、ナツメなど、私の好物が庭畑にいっぱいあった。川ではシジミ貝、鳥貝、ハヤ、フナ、ナマズ、ウナギなどがとれ、金魚藻が揺れていた。私たち、夏、天国のように思っていた鏡川では、小、中、高校を通じて朝から夕まで河童生活を楽しんだ。酷暑の南国だから水に親しむのも当然だった。鮎、ゴリなどとする人々もいた。私どもの中学では水泳は柔剣道とともに正科で、遠泳で修了の水泳は特に江湜クラブというクラブがあって、大学生から高、中学生、小学生(漫画大家になった横山隆一さんなどもいた)の交歓場であった。高い飛込台もあった。このクラブの連中で釣舟で浦戸湾へ漕

ぎ出て、種崎、桂浜へも行った。種崎は千松公園を後にする砂礫の浜で、足先で探るアサリ、ハマグリなどが浪遊びの間にとれるのが楽しみであった。桂浜は五色のツルツルした礫石でしきつめられていたが、サザエ、ウニなど岩礁生物や、色彩美しい小魚が水中眼鏡で楽しく眺められた。キャンプファイアを囲んでふんどしの河童連の歌い踊った思い出も楽しい。浦戸湾岸では、ハゼ、チヌ、ボラなどとれた。河口では、海水と河水の混るところでエビがたくさんとれ、晩のお菜になった。正義漢で詩人の父に浪人時代おともして、よくエビとりに行った。私は父を尊敬していた。

小学生時代、父が晩酌をやりながら「里見八犬伝」「西遊記」「三国史」などの珍しい話を時々してくれた。青鼻汁^{アヲシ}たらしの私も、「鼻茸」を手術して物覚えがよくなり、中学へ入ると成績が急によくなった。上級生には今の学士院長の有沢さんや芸術院長の有光さんがいて、中学でもトップクラスであった。

「よく学び、よく遊べ」というのは学業の目標であったが、吾が家では両親もだれも勉強を口にしなかった。ただ祖母は「これは孝彦（私の叔父）が中学卒業の褒賞にももらった本だよ」と「西国立志編」という本を出してくれ、読みふけた。小学生時代は「真田十勇士」とか忍者本に読みふけり、空想をふくらました。友だちとトランプ、花札、将棋指



しもしたが深入りはしなかった。中学では山登りしては山頂で大声で嘯ぶくのは河童仲間、で、テニスも暇があればよくやったが、乱読雑誌が好きで、父の蔵書（日本史、進化論、宇宙発展論、星辰論など）や図書館（中央公論、改造などの小説など）で読みかじり、生意気、混沌の頭でやたらに議論した。河上肇の「貧乏物語」や大杉栄の本などのぞいて、校長先生の「修身」の時間に「世界政府」をつくって貨幣も言語も一つにしたがよいと生半解をのべ、「君はまだ若い」とさとされ、いら立った。社会主義にかぶれかけた級長の私の発言に副級長の浜田君は反対して国家主義をのべた。彼は後に大会社の社長にもなり、海洋学者になった私を援助してくれた。今思うと私も出鱈目で、「資本論」など読んでもいなかった。

家計上「海軍兵学校」志望になったのは、近くに「海援隊長坂本龍馬」や日本海海戦の参謀長・島村速雄（元帥）の生家があったこと、小学生の時砲艦を見学し、将来は海軍軍人に書いたこともあったが、学費無料が第

一だった。中学の学費は叔父の援助であった。受験準備は中学三年から始めた。代数、幾何、英語、国漢で、無料の塾もあった。「考え方」「受験問題集」(十年分)をのぞいて傾向がわかれば、解答は暗記ですんだ。中学の学期末試験は一週間前から暗記で頭へたたきこんだ。梅雨ごろ、楊桃を盆に盛って喰べながらだった。四月、教科書を入手すると、好奇心の強い私は直ぐ通読し、あとは教室だけで、予習復習は余りしなかった。「アインシュタインの相対性原理」の解説が図書室の東洋学芸雑誌に出ているのに興味を持ち、学友と話題となり、寺田寅彦先生（東大教授）の母校での講演をきいたのが、物理学への興味の萌芽だった。海兵入試九月の前に、四年修了で小手試しに仙台二高を受けたら合格した。果から学費が頂いたので、兵学校は、やめた。だが結局東大物理で寺田先生、藤原咲平先生などの教導で昭和二年から半世紀、海洋学、氣象学で過すことになった。

十代の終りごろ、土佐と伊子の境の石槌山、大野ヶ原方面、鐘乳洞探険の冒險記念無銭旅行を中学親友四人でやった。横倉山の安徳天皇御陵伝説の社で一晩過し、U君（後に科学技術庁長官）は腹をこわした。熊毒などたべながらの一週間の旅だった。二高では哲学、理学、文学などの学徒となり、陸上競技選手で、それまでの生活と一変脱皮した。